



撮影：片桐 昌夫

串田孫一 生誕110年を迎えて

館長 山崎ちづ子



串田 孫一

山の文芸誌「アルプ」の責任編集者だった串田孫一さんは、1915年に誕生、2005年に永眠されました。今年は生誕110年、没後20年になります。数多くの著書を生み出した書齋が当館に移築、公開されてから12年が経ちました。

詩人で画家の田中清光さんは、この書齋を「知の結晶された空間として見てもらえれば」と記していますが、この間にたくさんの方々に見ていただきました。でも残念なことに、月日の流れと共に若い人たちには串田孫一さんの名前を初めて知る方々が多くなっています。

しかし地球規模で気候変動が起きている今だからこそ、自然で遊び、学び、畏怖の念をもって自然に接し言葉にした串田孫

一さんの世界を知ってほしいと思います。

今年度「串田孫一の仕事部屋」展示室にて、本の挿絵の原画展を開催いたします。印刷された挿絵とは違う原画の面白さをご覧ください。木漏れ日の中で串田孫一さんの書物を手にしていただければ幸いです。

休館日変更のお知らせ

2025年4月末より月・火・水曜日を休館日といたします（ただし、祝日の場合は開館いたします）。お客様には大変ご不便をおかけいたしますが、ご理解のほどお願い申し上げます。

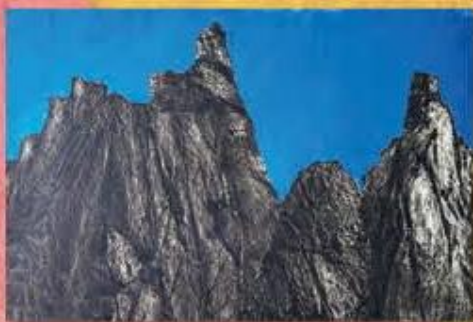


2025企画展のお知らせ 「所蔵作品展－アルプの表現者たち－」パート2

会期 2025年6月12日(木)～2026年5月24日(日)



畦地 梅太郎「熊谷の残雪」



一原 有徳「Mt.Akaiwa」



坂本直行「マチャブチャレ」(ヒマラヤ)



本展では、山の文芸誌「アルプ」に参加した作家たちの絵画、版画、書、直筆原稿、押絵原画などを展示いたします。

〈展示作家〉畦地梅太郎、石川滋彦、一原有徳、今西祐行、岩見禮花、大谷一良、岡部牧夫、岡本寛志、尾崎喜八、北岡文雄、城所祥、串田孫一、熊谷樞、栗田政裕、坂本直行、曾宮一念、武田泰淳、田中清光、田淵行男、辻まこと、中村朋弘、永野英昭、磐広人、藤江幾太郎、真垣武勝、宮本常二、山口燾久、山室真二(50音順)



大谷 一良「月下山群」

訃報に寄せて

山崎猛初代館長と長く親交があり、お世話になった方々が亡くなられました。心よりご冥福をお祈り申し上げます。

田中 良さん(2024年12月20日逝去/100歳/画家)

二科会名誉理事長をされていて、斜里やオホーツクの風景を好んで描いていました。温厚な人柄と厳しい中にも温かみのある絵は斜里にも多くのファンがおります。100歳を超えてもお元気で、亡くなられる1週間前まで絵筆を手にしていたとのことです。

武田 厚さん(2025年4月7日逝去/84歳/美術評論家、元道立近代美術館学芸部長、元横浜美術館副館長、元多摩美術大客員教授)

北のアルプ美術館設立前から一般社団法人に移行するときまで多大なご尽力をいただきました。美術館の存在する意味を考えさせて下さる方でした。

2024年の振り返り

3月1日 開館
6月14日 所蔵作品展「アルプの表現者たち」(5月25日)
8月11日 山の日ブックカフェ
10月17～31日 しれとこハロウィンの森in北のアルプ美術館
The Final(主催:しれとこハロウィン実行委員会)
11月30日 仕事納め
12月1日 大掃除(ボランティア参加者12名)

昨年12月に北海道発・冬季限定スイーツSNOWSから「スノーサンド 北のアルプ美術館パッケージ」が発売され、当館でも特別販売をしました。販売元のCOC様より売上の一部を当館の運営費用として寄付していただきました。ご購入いただいた皆様、ありがとうございました。



SNOWS
公式サイトの
当館紹介記事



寄稿① 「アルプ」その命脈をつなぐ絆

鈴木 伸介 《東京都小金井市/（元）日野春アルプ美術館》

自らの夢の実現のため、山の雑誌に手を染めた創文社社長久保井理津男。請われて編集主幹を担うことになった串田孫一。

依頼を受け小誌名に「アルプ」を提案した詩人尾崎喜八。串田に招集された若き編集委員、山口耀久、岡部牧夫、三宅修。社内

串田、尾崎両氏の指導、薫陶を受けた筆は、「アルプ」の世界を余す所なく描き切っている。

追悼集「アルプ」特集串田孫二である。帯に書かれた惹句のように、山、思索、自然、芸術の達人たちによる串田孫二像に示された63人による串田との交歓文である。

これら活字文献の整備と共に重要なのは、それらを収集蓄積し、展示閲覧を可能にする施設の存在である。「アルプ」を冠称にした二つの内、山梨で25年間開設されていた「日野春アルプ美術館」は残念ながら昨年2023年にクローズし、残るは斜里で30年を越えて命脈を維持している「北のアルプ美術館」1館だけになっている。

狂乱のバブル経済が破綻することを見透かすように幕を閉じた山の文芸誌「アルプ」。串田さんや編集委員のこだわりと矜持を今なお強く感じる。山岳文化に残るその孤高の立ち位置と四半世紀に及ぶ発刊の軌跡は、その輝きを今も失っていない。時を越え、今後もなお一人でも多くの人々が斜里を訪れ、「アルプ」の世界を味わってほしいものである。

余りの、有名無名の各界各世代の人々。昭和100年目を迎えている今年、昭和58年に終刊して既に40年を越えている。25年300号に及ぶこの小冊子を俯瞰すると、上記の人々の多くは彼岸に渡り、今や言葉通り往事

「アルプ」を語り継ぐべき語部も又、高齢化し少数化している今、その命脈をつなぎ止める絆になるものは何か。

一つは様々に刊行された書籍や文献である。昨年2月97歳で一期を終えた山口耀久が、「アルプ」終刊から30年後の2013年、山と溪谷社から刊行した「アルプ」の時代がある。山岳書の名作「北八ッ彷徨」を著し、

斜里を訪れ、「アルプ」の世界を味わってほしいものである。

この土地に来てからいつも誰かが伸ばしてくれた手につかまっている。自分も表現者として手を伸ばし続けた。人間にも自然にも出会いたく毎年斜里に通い、芸術祭にのめり込んで活動した。すでに町に根付いていた文化と、新しい文化が手を取り合って、驚くような素晴らしい瞬間を芸術祭では何度も体験した。

「アルプ」の時代がある。山岳書の名作「北八ッ彷徨」を著し、

斜里を訪れ、「アルプ」の世界を味わってほしいものである。

斜里を訪れ、「アルプ」の世界を味わってほしいものである。

斜里を訪れ、「アルプ」の世界を味わってほしいものである。

斜里を訪れ、「アルプ」の世界を味わってほしいものである。

寄稿② 斜里に通って5年目

今野 裕一郎 《東京都中野区/演劇作家、映画監督、パストリオ主宰》

はじめて斜里にきたのはコロナ禍だった。音楽家の友人にプロモーションビデオを頼まれ撮影でやってきた。あのときほとんどの人がマスクをしていた。世界中がそう

1年目はアルプ美術館のちづ子さん家を貸してもらい、2年目はしれとこくらぶの裕子さんに家を借りた、3年目は斜里温泉近くのアパートを借りて、4年目は峰浜で暮らす友人の家に泊まった。はじめての家を転々とする生活は楽しかった。

この土地に来てからいつも誰かが伸ばしてくれた手につかまっている。自分も表現者として手を伸ばし続けた。人間にも自然にも出会いたく毎年斜里に通い、芸術祭にのめり込んで活動した。すでに町に根付いていた文化と、新しい文化が手を取り合って、驚くような素晴らしい瞬間を芸術祭では何度も体験した。

はじめては死ぬまでやってくる。2021年、斜里で出会った友人たちと芸術祭を立ち上げたのもはじめて。葦の芸術原野祭と名付けてコロナ禍に始めた。それ

はじめては死ぬまでやってくる。2021年、斜里で出会った友人たちと芸術祭を立ち上げたのもはじめて。葦の芸術原野祭と名付けてコロナ禍に始めた。それ

はじめては死ぬまでやってくる。2021年、斜里で出会った友人たちと芸術祭を立ち上げたのもはじめて。葦の芸術原野祭と名付けてコロナ禍に始めた。それ

はじめては死ぬまでやってくる。2021年、斜里で出会った友人たちと芸術祭を立ち上げたのもはじめて。葦の芸術原野祭と名付けてコロナ禍に始めた。それ

はじめては死ぬまでやってくる。2021年、斜里で出会った友人たちと芸術祭を立ち上げたのもはじめて。葦の芸術原野祭と名付けてコロナ禍に始めた。それ

はじめては死ぬまでやってくる。2021年、斜里で出会った友人たちと芸術祭を立ち上げたのもはじめて。葦の芸術原野祭と名付けてコロナ禍に始めた。それ



Event

8/11(月)「山の日」
串田孫一さんの
スケッチブック
特別上映

8月11日(月)「山の日」に、串田孫一さんの書斎の書棚に保管されているスケッチブックをデジタル画像を通してご覧いただきます。貴重な機会ですので、ぜひお越しください！



Atelier

大谷一良さんの
アトリエ移築・復元
公開予定

版画家・大谷一良さんのアトリエを東京都八王子市から移築・復元し、秋頃公開に向け準備中です。公開日について詳細が決まり次第、公式サイトや公式Xでお知らせします。

Alp Museum



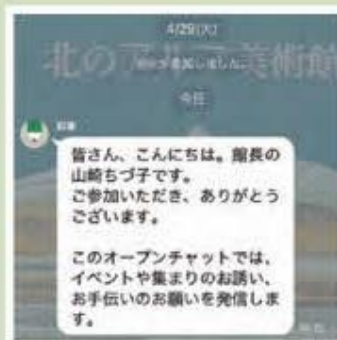
Information



Forest

新たな
アルプの森づくりを
進めます

「アルプの森」のシンボルの白樺は、初代館長が植えて40年が経ちました。枯れ木が多くなり、通学路への倒木の危険があるため、伐採することになりました。多くの方々に親しまれてきた木々なので残念ですが、これから新たな森づくりを進めて参ります。



Volunteer

ボランティア情報
などを発信する
オープンチャットを
開設!!



当美術館のイベントのお誘いや、ボランティアのお手伝いのお願いを発信する、LINEのオープンチャットを開設しました。興味がありそうなご友人の招待も歓迎です。

編集後記

昨年、常設展示室の展示替えを行い、ミニ企画展「それぞれの斜里岳」を開催しています。この展示替え後に思いがけない展開が待ち受けていました。ある日、道外から一人の女性が来館。彼女は初めての知床旅行で何げなくこの北のアルプ美術館に立ち寄ったという。そこに10年以上前に他界した彼女の父が描いた斜里岳の絵が展示されているのを見つけ涙が止まらなかつたそうです。いくつかの偶然が重なり、遙か北の地で父と娘が出会うという予想外の嬉しい出来事でした。(上美谷)

北のアルプ美術館のお手伝いをしている川村です。お世話になった山崎猛さんや、現館長のちづ子さんや上美谷さん、美術館を見守る多くの方々と共に、これからの美術館を支えていきたいと考えています。(川村喜一・芽惟)

アルプ基金・寄付金 報告

2024年4月1日から、2025年3月31日まで、489,044円となっております。ご協力、ご支援に心より感謝とお礼を申し上げます。

公式サイト



北のアルプ美術館 北海道斜里郡斜里町朝日町11-2

Tel.0152-23-4000 <http://www.alp-museum.org>

夏期(6月~10月) 10:00~17:00 冬期(11月~5月) 10:00~16:00
月・火・水曜日休館(ただし、祝日の場合は開館)
12月~翌年2月末は冬期休館

北のアルプ美術館より「緑風」No.33

2025年6月発行

編集：山崎ちづ子/上美谷和代/川村喜一/川村芽惟

編集補助・デザイン：中山よしこ

印刷：(株)斜里印刷